

日本の肉用牛の祖先



見島牛(みしまうし)

現在の肉専用種は、明治時代に在来の和牛に多くの外国種を交配して作られたが、見島牛は外国種の影響を全く受けていない在来和牛の唯一のものである。山口県見島に保存会の努力で雌85頭、雄14頭(平成18年)が飼育されている天然記念物である。毛は黒く体はきわめて小さいが、肉質、ことに脂肪交雑は安定して極めてよく、黒毛和種の基となった牛である。

(写真提供:山口県農林水産部畜産振興課)



アバディーンアンガス種

大正時代に山口県で和牛に交配して無角防長が作られた。昭和に入ってさらに無角防長種に交配され、無角和種が作られた。被毛は黒毛で角がない。イギリスのアバディーン州、アンガス州で在来牛を改良した小型の肉専用種。西洋の牛の中では最も肉質が良いとされている肉専用種の代表的品種。

(写真提供:家畜改良センター 十勝牧場)



シンメンタール種

明治時代に褐毛和種を作るのに使われた。スイスのシンメンタール谷が原産地で毛色は淡黄褐色又は赤褐色で顔は白く、四肢も白く、背などにも白斑があらわれている。ヨーロッパの牛の中でも大型で、乳肉兼用種でもある。スイスを中心にフランス、オーストリア、ドイツ、イタリア、チェコ、イギリス、アメリカ、オーストラリアなどで飼育されている。

(写真提供:熊本県農業研究センター 畜産研究所)

出典:一般社団法人全国肉用牛振興基金協会
ホームページ <http://www.nbafa.or.jp/>

食肉情報等普及・啓発事業／公益社団法人日本食肉協議会助成